土砂災害から身を守るために

太田市立宝泉東小学校　六年　杉浦　心花

テレビを見ていると、時々見かける「気象速報」。自分の住む町ではなく、知らない遠くの地域の名前を目にするたびに、ひ害が少ないことを願っている。しかし、毎年のように、日本では土砂災害によるひ害が後を絶たないように感じる。なぜ、土砂による災害がくり返されるのか、そこで自分たちができることは何かを調べてみた。

日本は、国土のほとんどが山地やきゅうりょうちでおおわれていて、平野は海岸ぞいや川ぞいにわずかにあるだけの地形だ。そのため山や崖などが雨によってくずれる災害が起こりやすい。また、日本の年間平均降水量は、約千七百ミリメートルで、世界の平均の約九百七十ミリメートルに比べて、特に降水量の多い国であることがわかる。そして、日本の雨の特ちょうは、梅雨や台風などの時期にまとまって大量に降るということだ。このようなことも土砂災害が発生しやすく大きな被害を受ける原因になっている。

次に、土砂災害が起こった時の対策を考える。まず、正しい情報を手に入れることが大切だ。今年の七月初めに九州地方でおこった大雨の時には、鹿児島市は市内全域でひなん指示を出した。一日で、平年の七月一ヶ月分の雨の量をこえる雨が降ったため、早い段階で広いはんいにひなん指示が出た。一つの市の中でも、山や川に近い地域もあれば、住宅が並ぶ平地もあるが全地域がひなんの対象となったことに、速報を見た私もおどろいた。後のニュースで、この市内全域のひなん指示が混乱を招いたと知った。ひなん場所に人があふれてしまったことや、介護施設や病院などでは短い時間で体の不自由な人を大勢ひなんさせなければいけない大変さがあったという。きん急性の高い地域や人を優先してひなんさせる判断が必要だったと思う。これには自分の住んでいる地域がどのように危険なのか自分で判断する力もつけていなければならないと感じた。

土砂災害から命を守るために必要なことは事前に防ぐ方法もある。急な崖がくずれないように、コンクリートのかべを造って土砂をおさえたり、動き出した土砂が土石流になって流れるのをくい止めるために、砂防えん堤とよばれる施設を設置する方法があることを初めて知った。学校の社会科の授業で、日本の山は、林業を継しょうする人が足りないことや、海外からの木材の輸入で国産の木材が使われなくなってきていることで、山林の管理が十分に行われなくなっていると学んだ。やせてしまった森林では、土砂災害を防止する役割を果たせなくなってしうそうだ。

私たちの生活を土砂災害から守るために砂防事業が進められているが、土砂の動きを完全に止めることや、日本中にたくさんある災害が起こる危険がある場所全てに対策を行うことはむずかしいそうだ。だからこそ自分自身に何ができるか考えることが必要だ。

私の住む市にも防災マップが配布されている。それを見るとたくさんの大切な情報が書かれている。ふ段生活していても気付かない危険な場所が分かり、もしもの時どう行動すればよいかシュミレーションすることができる。明日、私の住む町に大雨警報・ひなんかん告が出されたら、危険をどのように判断し、どんな道を通ってどこへひなんするのか、家族とはなれていた場合どこで集合するのか、家族とはなれていた場合どこで集合するのか、しっかり家族と話し合い準備するのが、今からできる安全・安心への最も良い方法だと考える。